

文部科学大臣賞



無心の自分

山口 杏（神奈川県・大学3年）

大学1年。ずっと憧れていた数学の教員になりたいという強い志で、教職コースに進んだ。誰よりも努力して、数学も、ボランティアも、教職を目指しての活発な活動にも参加しようと思っていた。ボランティア活動は数学と同じくらい好きで毎週土日が全部なくなるくらい色々な活動に参加してきた。さっそく、大学での活動の1つである教育支援ボランティアの依頼を受け、ある高校生の登校支援を始めた。駅に集合して途中まで電車で一緒に通学するという生活を続けた。勉強が苦手な訳でもなく、友だちが出来ない訳でもなく、ただ気力が湧かないという理由だけで学校に行けなくなってしまった…。この気持ちは私にはまだ理解が難しかった。

一方で、私の数学の実力は全く足りなかった。自信と夢が全部崩れ落ちるようだった。仲間が自分より熱心なのに自分は何もする気が起きない。今よりさらに差が付いてしまうことが怖くなかった。学校を休みがちになり、友達から「大丈夫？」と連絡が来る。本当は何も大丈夫ではないのに「大丈夫だよ」と布団の中で返した。甘えだと思った。贅沢な怠惰だと思った。無気力なんてただの言い訳じゃないのか？こんなに辛いのに、責めているのは同じ自分。自分のことが大嫌いになった。なぜこのような状態になっているのか自分でも分からなくて、あなたは病気だ、と誰かにはつきり言って欲しかった。「なんで？何が怖い？」と自問を繰り返した。

誰もいなそうな時間を見計らい、先生に会いに行った。このモヤモヤを少しでも分かってくれるかと思っていた。無気力で身体が動かないこと、自分の実力が無さ過ぎて活動について行けなくなってしまったことなど、全部話した。

「なんで？わからない。」

いろいろと質問されたが、自分でも何もわからないことを涙目になりながら話した。休学届けの提出には殆ど抵抗を感じなかった。休学中は出来るだけ何も考えないようにしようと思った。

それから、毎日アルバイトをすることにした。続けるうちに自分にとっての大きな居場所になった。自分自身の行動は周囲の人にとって意味を持つことに気が付いた。朝のシフトにも入れてもらい、責任感が無気力に勝利した。

こうして、活動できる時間が増え、休学期間に中に思う存分好きなことを精一杯やろうと決めた。夏休みの期間で東日本大震災仮設住宅訪問のボランティアに参加した。ボランティアに集まってきた中学生、高校生のリーダーを務め、そのチームで炊き出しや清掃を行った。活動をする中でさまざまな人たちとの出会いがあった。価値観の多様さ、信念の強さを感じることができ、それらが自分を成長させてくれる実感があった。自分より年下の人たちが、懸命に何も恐れることなく、チャレンジしていく姿を見て、自分が気にしていたこと、怖かったことがどこかに飛んでいった。人目も、評価も気にすることなく、知識も権威も何もいらない。無心にボランティアをしている時の自分は、どんな姿をしていても好きになれるような気がした。

今ならあの高校生の気持ちも理解ができ、教室で習うことよりも大切なことに気付くことができた。この1年間のことを人は無駄な時間だった、と言うかもしれない。だが私は、この1年間という壁を乗り越え、確実に強くなれた。だから今の私がここにいる。休学期間が終わり、今までの自分とお別れをした。もし、あの頃の自分にもう一度会えるなら こう伝えたい。

「よく生きててくれた。ありがとう」と。

SYD理事長賞



大きな広い心を持っている

佐戸 優妃（千葉県・中学校3年）

フィリピンで過ごした1週間は言葉では表現することができないくらい濃いものとなった。私が想像していた「フィリピン」とは全く違った。夜の12時を過ぎているのにもかかわらず裸足で路上を駆けまわる子ども、周りには必ずゴミが散らばっている。衝撃しかなかった。

まず、2日目のナボタスに行く途中ではバスの外にいるスラムに住んでいる人が、私たちをとても不思議そうに見てくる。そして、手で「何かちょうどいい」とジェスチャーをしてきた。子どもは破れた服を着ている子もいれば裸の子もいた。ゴミで溢れかえっていて、とても不衛生な環境で生活している。ナボタスの保育園ではみんな私たちのところにかけて寄ってくる。子どもたちの笑顔が宝石よりも光り輝いていた。こんな心の底から笑っている子どもを見るのは何年ぶりだろうと思った。私たち日本人が「あたりまえ」と思っていることすべてがここフィリピンでは最高の幸せでした。

3日目は市内小学校を訪問した。みんな私たちを歓迎してくれていて、フィリピンと日本の旗を振っていた。障害を持っている子もたくさんいたが、一生懸命になってダンスを披露している、心を一つにして発表している姿に感動した。4日目はスマーキーマウンテンを訪問した。そこはゴミの山だ。独特の匂いもする。私たちはゴミ山の中のある家に行ったが、そこは日本の家よりも何倍も狭く、すぐに壊れてしまいそうだった。しかし、そこにも笑顔があった。どんなに苦しい状況でもフィリピンの人々は笑顔を忘れない。私はそう感じた。

5日目の子どもたちとの遠足は忘れられない思い出となった。私と一緒に回った子は、4日目に訪問した学校であげた支援バッグを幸せそうに動物園にまで持ってきてくれていた。私はとても嬉しかった。お菓子やアイスを買ってあげると、必ず最初に「優妃が食べて」と言ってきてくれる、その子たちは十分なお金も食べ物もないはずなのに人に自らの分のものをあげができる。そのような思いやりの心が育っている。自分も見習わなければならないと思った。お昼になるとジョリビーのお弁当をみんなで食べた。しかしその子たちは半分だけ残す。「なんで残すの？」と聞くと「これは今日の夜ご飯のために取っておくの」と、小さな声でつぶやいた。日本では考えられないことだ。

その子たちとの会話で印象に残っていることがある。私は「フィリピンの子の自慢できるところはある？」と尋ねた。その子は「フィリピンの人たちは笑顔を大切にしている。みんなとても温かいの。私は貧しい暮らしをしているけど、フィリピンに生まれてよかった。私はフィリピンが大好き」と言った。私よりも年下なのに自分の国の誇れるところを堂々と語っている。私は圧倒された。その子たちは私と一つや二つしか年が変わらないのに私よりも大きなものを持っている。それは広い心。私はその子たちと接していく中で、前まで忘れていた人間の本当の優しさを思い出すことができた。その子たちの笑顔は私を励まし幸せにしてくれた。私は愛で満たされていた。

6日目はマザーテレサの施設を訪問した。そこで一人のシスターに出会った。シスターは自分の人生すべてを人のために差し上げている。なんて素晴らしい人なのだろう。私も困っている人や貧しい人のために生きるシスターのようになりたいという思いが強くなった。

たしかにフィリピンより日本のはうが経済や交通などが発達している。しかし何かが足りない。それは人と関わることであったり、思いやり、私たちが今こうして平和に幸せに生きられていることへの感謝。いろいろな部分につながってくる。フィリピンのスラムに住んでいる人たちは粗末な家に住んでいる。しかし、お互いを理解し合い支えあいながら生きている。私は今回ボランティアをさせてもらって貴重な体験をし、五感が刺激され成長することができた。ここで終わりではない。フィリピンで学んだ多くのことを私はこれからも伝えていく。少しのことからでいい。私たちにできることはたくさんある。いつか「世界中の人たちが心から笑い、幸せに暮らせるように」私はこれからも行動し続ける。

優秀賞



ボランティアとは何だろう

福野 亜美（福井県・小学校5年）

ボランティアとはなんだろう。私は今年多くのボランティアに参加し、多くのことを学ぶことがでた。

夏休みにはボランティア体験講座に参加した。1回目は、目の不自由な方のお話を聞き、伴走ボランティアの体験をした。最初はとてもむずかしく、コーンにぶつかったりした。しかし、曲がる時には「5m先曲がります」。直前で「右90度」等と言うように、どのように伝えたらいいのかアドバイスをもらい、息を合わせて走ることができた時はとてもうれしかった。

2回目は、車いす体験と高齢者疑似体験をした。私が自分で車いすを走らせようとすると、行きたい方向ではない所に行ってしまったり、ほんの少しの坂道や段差もあがることができなかつたりと、とても大変でした。高齢者疑似体験では、何気ない動作が、年をとるとこんなに大変なのかとおどろいた。目の不自由な方も車いすで生活している方も、少しの工夫で私たちと同じような生活をしていることが分かった。ただ、困ることはあるとお聞きしたので、私は、それはしようがいがあってもなくても同じだと思った。私は、困っている人に出会ったら優しく声をかけられる人になりたい、とその時思った。

秋には、東日本大震災被災地交流事業に参加した。ふだん考えることのないことを、改めて真剣に考えた。多くの人が亡くなってしまったことを、日本中の人が悲しいと思っている。それなのに、つらい心をみんなに伝え、忘れられないようにがんばっている人もいる。その方たちから直接お話を聞くことができた。心を打たれた。生きていることがありがたく思えた。

宮城県の大川小学校や閑上中学校を見学した。あまりの悲惨な状況に声も出なかった。みんなと仲良く学校へ行き、楽しく住んでいるこの町が、いっしゅんで津波にのみこまれてしまったら私はどうなるだろうと考えた。しかし、私には想像できなかつたのだ。生きていることがありがたい。生きていることがすばらしい。がんばろう。そのような思いで、私は福島県に向かった。仮設住宅で生活人たちに、心をこめて、一生けんめい歌を歌った。手話もした。涙を流しながら聞いてくれている人たちもいて、とても感動した。

ボランティアにもいろいろな形がある。困っている人に優しく声をかけ、お手伝いをするのもボランティア。しようがいを知ることもボランティア。そして、今回被災地を訪問して、被災地で見てきたこと、学んだこと、感じたことを多くの人に伝えることもボランティアだと思った。私に何ができるか、まだまだ考え中だが、その時その時を一生けん命に生き、できることを自分らしく、精一杯続けていきたい。

優秀賞



ボランティア活動を通して感じたこと

新城 和真（沖縄県・高校2年）

私は今までボランティアとは掃除するだけでなにも感じないものと思っていたのですが、1人の友だちがSYDの全国青年ボランティアで福島に行き、帰ってきたら性格がまるで別人になっていました。「食べ物は残すな、好き嫌いするな」と言うようになりました。なんで…。変わったきっかけとなったボランティアに私も参加してみようと思いました。

そして私も変わってしまいました。ボランティア活動では主に3つの大きな活動を行いました。1つ目は東日本大震災被災地の仮設住宅に行き“炊き出し”をし、私たちの村は焼きそばを作りました。住民の方々は「来てくれたありがとう」や「おいしかったよ」と笑顔で言ってくれました。本当なら私が励まさないといけないのに、逆に元気をもらいました。私はその時、人はどんな目にあっても前に進んでいく力があると思いました。2つ目は福島の特別養護老人ホームを訪問しました。私は、はじめ老人の方々と何を話せばいいのかが分からず、緊張していましたが、おばあちゃんから話してくれて本当にうれしかったです。“世界が一つになるまで”と“我が美しき故郷よ”、そして自分たちの村歌を歌いました。すると、歌っている途中で泣く人がとても多くいました。私はそれを見て、とっても感動してくれていると思い、やって良かったと思いました。

3つ目は、フィリピンのストリートチルドレンと呼ばれる子どもたちについて青木さんからビデオなどでのその現状を教えてもらいました。私はストリートチルドレンという言葉は知っていましたが、詳しくは知ろうとしてませんでした。まず見たのが、1人路上で寝ている子どもの写真でした。とても細くぐつたりしていました。私はその写真を見て体の中から何か湧き出てくるのを感じました。赤信号で止まっている車に物乞いをしている子どもたちやマザーテレサの施設に集まってる人々…。私は少しでもお金をあげてやりたいと思ったのですが…。私は持っているから分けられるけど、今日食べれるかわからない時に分けられることができるのかな？とかいろいろと考えました。

次にスカベンジャーというゴミ山に住んでゴミを拾って生活している人たちの写真を見せられました。とても臭い匂いの中もくもくとゴミを拾い、靴も履いていないのに歩きまわり、家族のために頑張っている子どもたち…。私はそれを見ると体からとても激しく何かが湧き出てくるようになって、何とも言えない気持ちになりました。SYDの活動でご飯を配っているのに、一口二口しか口にしないで親や家族のみんなにあげるという子どもも、本当ならすべて食べてしまいたいはずなのに、みんなにあげたい、親にあげたいと考える。なんて心のきれいな子どもたちだろうと思いました。匂いがうつるからと近づかなかったり、今日食べられるかわからないのに、私たちにたくさんの料理を出してくれたり…と。私はこんなにも人の心は優しくなるものかと思いました。私は今までの自分はいったい何をしてきたのだろうと思いました。コンビニの弁当や親の作った料理の中に嫌いなものがあると平気で残すし、親が何か言えば反抗したりしていて…、今までの16年間を悔やみ、人間として恥ずかしくなりました。言葉は少し乱暴になりますが、あんなところに生まれているのに親を恨まず、むしろ大切に思って少しの食べ物を分け合うなんて、とても素晴らしいってすごいことだと思いました。

私は本当の幸せってなんだろうと思いました。平和な毎日に退屈して学校でも居眠りばかりの自分、そして世界に貧しい人々がいるのに関心すらなかった今までの自分。それに比べて食べ物はないし毎日大変な思いをしているのに関わらず元気を人に与えられる仮設住宅に住んでいる人々、つらいリハビリや食事の制限があったり、認知症と戦ってるのにとっても元気で見ず知らずの今日会ったばかりの私たちに気をつかったり、一緒に泣いたり笑ったりする老人ホームの人々。私はいったいどちらが本当の幸せなんだろうと思いました。

私はこのボランティア活動を通して平気で食べ物を残すことは、道路で寝ている人々を見て見ぬふりをして通り過ぎていく人と同じだと思いました。私はこのボランティア活動がなければ一生気づけなかっただと思います。本当に参加して良かったです。これからもボランティア活動をして、1人でも多くの人たちに元気になってもらえるよう頑張っていこうと思います。

優秀賞



壁ドン

平田 宗一郎（長野県・高校2年）

中学三年の秋、私は何にも変えがたい、貴重な体験をしました。

当時、生徒会長だった私は、一ヶ月後の文化祭に向けて忙しい毎日を送っていました。「文化祭は生徒会の集大成だから、絶対成功させてやる！」そう意気込んでいた私でしたが、自分の思っているように仕事をしてくれない仲間に対して、段々不満を持つようになりました。私はただ、みんなで文化祭を創り上げたいだけなのに、どうして上手くいかないのだろう。空回りするばかりで孤立していました。

授業にも出られなくなるほど、自分の心をコントロールできなくなってきたとき、先生が仲間と向き合って話をする機会を設けてくれました。「今回こそ、自分の気持ちをみんなに伝える」と決心して挑んだのですが、皆の前に立って話しかめると自己を否定するような言葉しか出ません。こんな話をするはずではないと頭では理解しているのに、きちんと伝えることができない。だんだん私の感情は自分への怒りに変わっていき、やりきれない想いがあふれて、その感情を後ろの壁板にぶつけました。それが衝撃で壊れたことにも気付かず、私は泣き崩れ、とても長い時間、狂ったかのように泣き笑いをくり返しました。

今考えると、このことは、私にとって初めて大きな挫折でした。

そして、私はさらにどうすればよいか分からなくなりました。「あんな姿を見てどう思ったのだろう、もうみんなといつも通り接することができない…」。翌日は学校に行ける状態ではなかったけれど、家族や先生方に励まされ、勇気を出して登校しました。

すると、思いもよらず、沢山の友人が私を待っていてくれたのです。“私はこんなにも多くの人たちに支えられている” そう実感しました。考えてみると、この何週間は忙しさを理由に、周りの人たちへの“思いやりの精神”を失っていました。それを取り戻してくれたのは、友人や先生方でした。

それからの日々、文化祭が終わる最後の瞬間まで、私たちは認め合い、励まし合いながら全力で駆け抜けました。全てが終わった後、みんなが私を胴上げしてくれたことは、一生忘れません。今までのことが全て報われた瞬間でした。

こうして私はみんなに支えられて壁を乗り越え、そして“感謝の気持ちを持ち続けることの大切さ”を学びました。この経験は、その後の私を形成する礎となり、SYDの福島やフィリピンでのボランティア活動に繋がっています。また高校で、同志と共にボランティアクラブを設立し、自分たちに出来ることは何かを考え、微力ながら募金などの活動を行っています。

私はいつも“ありがとう！”という言葉を胸において過ごしています。これからもこの気持ちを大切にして“よろこびの種”を、身近な人たちから、そして私と関わる全ての人たちに、まいりていきたいと思います。

私にとっての『壁ドンストーリー』。あの時壊した壁板は、仲間からメッセージが書き込まれ、今も私の部屋に置かれています。

SYDきらめきメッセージ
全国コンクール